研究ノート――

幼稚園を対象とした鑑賞プログラムの実施 一井草幼稚園における模写・立体制作との連携を事例に

井上 真里奈

はじめに

「どうしてこんなところに。」とあるスーパーマーケットで偶然目に留まったのは、皇居三の丸尚蔵館(以下「当館」)収蔵の代表的作品、伊藤若冲筆 国宝《動植綵絵》のうち「群鶏図」を写した作品である(カラー口絵16)。原本をよく観察して描いたことがうかがえ、その制作者が数年前に近隣の幼稚園に通っていた園児たちであることに非常に大きな衝撃を受けた。さまざまな思いが頭を巡るなか、筆者は制作指導をした学校法人松峯学園井草幼稚園(以下「井草幼稚園」)に連絡を取り、制作の経緯などを聞いた。

井草幼稚園では、教育の一環として絵画作品の模写 (註1) に取り組んでいる。題材は教員の嗜好からジャンルの比率や園児の取り組みやすさを考慮して選定され、「群鶏図」の模写もその観点で制作されたという。制作活動に模写を取り入れ、江戸時代の絵画それも《動植綵絵》が選定され、驚くべき再現性であることなど、筆者は当園の教育に強い興味関心を抱いたのであった。

そんな偶然の出会いから1年あまり経った令和5年(2023)12月、井草幼稚園の園児・教員・保護者一同を 当館に迎え、展示室内で本物の《動植綵絵》と、園児が新たに制作した《動植綵絵》の模写を対面させるこ とができた。模写制作という幼稚園独自の教育プログラムとの連携を試みたことで、鑑賞の新たな可能性に 思考を巡らせる契機となった。また、受入前には対話を重視した出前授業や鑑賞シート制作など、園児たち の鑑賞をサポートする取り組みを実施し、今後の事業展開におけるひとつの指標とすることができた。令和 5年、宮内庁三の丸尚蔵館期から数えて開館30年を迎えた当館が、子どもを対象とする教育機関向けに行っ た初の教育普及事業 (註2) となった本事業は、さまざまな面から意義深いものであった。

本稿は、この一連の取り組みを当館と井草幼稚園の連携事業と位置付け、その内容を報告することを目的とする。まず、井草幼稚園の概略に触れ、連携事業実施に至るまでの経緯を述べる。次に、本事業について来館前と来館後の取り組みに分けて報告するとともに、受入後に実施したアンケートの結果を分析し、総括をする。最後に、本事業をふまえた今後の展望にも言及する。

井草幼稚園と模写制作

井草幼稚園は、東京都杉並区に所在する私立幼稚園で、昭和8年(1933)創立の歴史を持つ。福島県いわき市の浄土宗寺院・如来寺を母体とし、創立者である鈴木積蓄(1896~1934)は、仏教思想に基づく児童教育の実践の場として井草幼稚園を創立したという。積善の意志は「こどもたち一人ひとりに元来備わっている性格を見極め、それらを活かしていく」とする園の教育指針の根幹となり、現在にも引き継がれている(株式)。

園児の学ぶ園舎は、幾度かの大規模工事を経つつも、創立時の姿をほぼそのままに残しており、平成29年 (2017) に国の登録有形文化財に登録された (注4)。園内ホールには、阿弥陀如来像のほか額装や屏風装の書画 が多くある。このように文化財や作品が身近にある環境のなかで日々園児は学び育っている。また、教育にあたっては、古くから幼児教育に用いられてきた教材や教育方法を尊重し、実践を通じて継承に努めている。

造形活動は、自由制作に加え、身の回りの事物の写生や絵画作品の模写に取り組んでいる。写生は観察力を養う目的で古くから行われていたようである。絵画作品の模写は昭和50年代には行われており、平成に入ってから絵画指導の外部講師を迎えてより本格化、対象作品は日本の古画から西洋画まで非常に多岐にわたっている(#55)。対象学年は主に年中・年長組で、合同で1作品を制作する場合が多い。

模写に取り組むねらいは、作品をよく見ること、そして模写を通じて名画を体験することにあるといい (註6)、

子どもたちの自主性や創造性を重視する自由制作に対し、作品の再現のために教員が細かく指導する。同じ 造形活動でも自由制作は苦手だが、模写は得意だという子どももよくいるようで、子どもの特性が表れる部 分ともいえるであろう。

《動植綵絵》がつないだ縁

模写の題材の選定方法は、前述のとおり教員の嗜好に起因しており、当館収蔵の《動植綵絵》は過去に3幅取り上げられている (註7)。「諸魚図」「群魚図」と、筆者が目にした「群鶏図」である。

「諸魚図」「群魚図」は、園児各々が各幅に描かれる魚などのなかから気に入ったものを1つ選んで画用紙に模写し、それらを1枚のカーテンに貼り交ぜて展示をしたという。また、「群鶏図」は分担制作で、さまざまな姿の鶏を1羽ずつ画用紙に模写し、1枚の模造紙に貼り込んでいる。模造紙は原本より明るい緑色に塗られ、土坡や草まで丁寧に表現されているが、これらも全て園児が描いたものである。いずれの作品も若冲の表現を忠実に再現した、井草幼稚園ならではのオリジナリティ溢れる作品である。

毎年さまざまな作品の模写に挑戦している井草幼稚園であるが、《動植綵絵》を2回も取り上げていることに奇縁を感じ、当園の教育活動との連携の可能性を漠然と考えた。その後、当園が令和5年(2023)に創立90周年を迎えるにあたり、記念事業として当館収蔵作品の模写および原本の展示鑑賞ができないかという話があり、同年度中の実施を目指して作品選定を始めていたところ、同年11月より始まる「開館記念展皇室のみやび一受け継ぐ美一第1期:三の丸尚蔵館の国宝」展に《動植綵絵》8幅(半期4幅ずつ展示替え)が展示されることが決まった。こうして、《動植綵絵》の模写および粘土を用いた模造と模写を組み合わせた立体制作(註8)、そして当館での展示鑑賞という連携事業を実施することとなった。

来館に向けて

来館日が12月11日(月)と決まり、井草幼稚園では9月より約3ヶ月かけて、来館時に展示の「梅花群鶴図」「棕櫚雄鶏図」「紅葉小禽図」「貝甲図」4幅の模写・立体制作に年長組・年中組・年少組・満3歳児クラスの全4クラスで分担して取り組むこととなった。制作に関しては園に一任する傍ら、当館では園児の受入にあたり、事前に職員と交流を図ることで安心して来館してもらうこと、また模写・立体制作の原本以外の作品も楽しんで鑑賞してもらうことを目的として、筆者らによる園舎での制作風景見学・出前授業の実施、鑑賞シートの制作を計画した。

(1) 制作風景の見学

10月19日(木)、筆者らは園舎に訪問して各クラスの制作の様子を見学した(図1・2)。教員の指導のもと、図版コピーを見ながら一生懸命に制作する姿からは、幼児とは思えぬ高い観察力と画力をみることができた。交流時には、多くの園児が自ら描いたり作ったりした箇所を嬉しそうに筆者らに教えてくれたことが印象的であった。また、制作にあたっての教員のアイディアも示唆に富んでいた。以下、各4幅の制作方法を指導計画書や教員への聞き取り、アンケートの記述内容から簡潔に紹介する(単9)。



図1 鶴の足を描く様子(「梅花群鶴図」)

「梅花群鶴図」 年長組制作 (カラー口絵17)

鶴は画用紙に絵の具とクレヨンで一羽ずつ描き、模造紙に貼り合わせる。梅花の花弁は染めた和紙を重ね

て貼り付け、雄しべは着色したボンドを乗せて立体的表現とする。樹木や背景は、模造紙に絵の具で直接描く。

「棕櫚雄鶏図」 年中組・満3歳児クラス制作(カラー口絵18)

鶏の顔や足は模造紙にクレヨンで描く。羽は染めた和紙をちぎって貼り合わせることで、立体感を表現する。棕櫚の幹や葉、背景は模造紙に絵の具で直接描き、にじみの表現を再現する。

「紅葉小禽図」 年少組制作(カラー口絵19)

紅葉の葉は模造紙にクリアファイルを切り抜いた型によるステンシルで描く。原本にこだわり過ぎず、なるべくたくさん描くことを意識。小禽は和紙をちぎって貼り合わせることで、立体的に見せる。幹や枝、背景は模造紙に絵の具で直接描く。

「貝甲図」 年少組制作(カラー口絵20)

原本に描かれる多様な貝を紙粘土で制作。成形後絵の具で着色し、模様なども再現する。これらの貝を原本を参考に模造紙に配置する。模造紙は、他の幅と同様に地色を塗り、絵の具で流水を描く。

画材や方法の選定では、特別な画材ではなく普段から馴染みのあるものを使って、子どもたちがやりやすく、楽しく制作できることを意識したという。 実際に、和紙をちぎって模造紙に貼り付けたり、粘土で貝の形を成型したりする園児たちは、集中しながらも遊び感覚で造形に向き合っているように感じた。

加えて、原本の表現を忠実に再現するための工夫も特筆すべき点である。「棕櫚雄鶏図」や「梅花群鶴図」にみられる細かく線を引き重ねて表す羽毛の描写は、はじき絵の技法を用いて表現した。また、



図2 和紙を貼り付けて鶏の羽を作る様子(「棕櫚雄鶏図」)

4幅共通で、原本の微妙な色彩変化も絵の具の濃淡によってうまく再現しようとしたことがうかがえる。教員方の観察力とアイディア力の結晶といえる。そして、実際の制作を通じて、園児もまた卓越した観察力を身につけることとなる。ここで培われた力は、制作や美術鑑賞にとどまらず、子どもたちの人間的成長に非常に大きな意味を持つこととなるであろう。この見学を通じ、幼児教育のプロである教員方とその指導を受ける園児からは、多くの知見を得ることができた。

(2) 出前授業「鑑賞エクササイズ」の実施

第2回目の訪問となる11月28日(火)、作品鑑賞の練習という意味を込めて「鑑賞エクササイズ」と題する 出前授業を行った。来館当日は展示されない当館の収蔵品3点をピックアップし、「これみっけ!」「まねっ こ」「えのなかにはいろう」という3つのポイントで、対話をしながら作品を鑑賞した。以下、概要と園児の 反応について簡単に記す。

参加人数:年長組・年中組・年少組・満3歳児クラスの園児16名、教員4名

見学:保護者6名 所要時間:約30分

鑑賞ポイント①「これみっけ!」《諸物図壁掛》(図3)

作品鑑賞のはじめの一歩として、作品に表されている色々な文様のなかから知っている形や色を見つけてもらった。鳥や魚、船といったわかりやすい文様について多く発言が出たり、茶碗の上に乗った人物の顔に注目して大きな笑いが生まれたり、予想以上に盛り上がりを見せた。さらに、実際には漁で用いる梁を表す赤地に白い網目のある文様(図3右上)については、「太鼓がある」「布団にみえる」など多様な意見が出され、「人によって、太鼓に見えたり、布団に見えたり、いろんな見方があったね。どれも間違いではないよ。こうやって色んな人の意見を聞くともっと面白く見えてくるね」とコ



図3 《諸物図壁掛》1974年頃 当館収蔵

メントをした。導入でありながら、異なる意見を聞きながら自分の意見を次々に発言する園児の様子からは、多様なコミュニケーションを生み出す対話型鑑賞の片鱗をみることができた。

鑑賞ポイント②「まねっこ」《絵師草紙》(図4)

作品に登場する人物に注目し、その姿勢を真似てもらった。最初に、片足を上げて舞いをする男性(図4中央)の姿勢を真似てもらうと、バランスを取るのに苦戦しながらも上手に再現していた(図5)。次に、床の破損部に足を落とし入れて体勢を崩す女性(図4左)の姿勢を真似てもらうと、一斉に寝転んで楽しそうに試みていた。なかには、腕の曲げ方なども忠実に再現しようとしている子もおり、描写をよく観察していることがわかった。ここで描かれている宴という場面については、園児たちにとってなじみがなく、理解が難しかったようである。しかし、人物の姿勢を真似るという身体的方法を使うことで、楽しく鑑賞することができたのではないかと考える。

鑑賞ポイント③「えのなかにはいろう」《ナイアガラ景図》(図6)

作品の中央に描かれる船のなかに入り込んだつもりで、まずは音や気温、においなど、視覚以外の感覚を使って場面を想像してもらった。自由に想像して発言してもらうことが難しいように感じたため、「どんな音がするかな?」「ここから煙が出ているよ、どんなにおいがする?」と順に問いかけをしたところ、「(筆者補足:音に対して)ばしゃーっ」「(筆者補足:においに対して)くさい」といったように、活発に発言が出ていた。また、この船が進むとどうなるか、と問いかけをしたところ、「濡れ



図4 《絵師草紙》伝 藤原信実 鎌倉時代 (14世紀) 当館収蔵



図5 人物の姿勢を真似ている様子



図6 《ナイアガラ景図》五姓田義松 明治22年(1889) 当館収蔵

ちゃう」「岩にぶつかる」といった発言があり、描かれている場面からの時間的推移も想像できていることが認識できた。本作品の鑑賞から園児たちの豊かな想像力を実感した。

約30分間の実施中、退屈している園児は少なかったようにみえた。園児とのコミュニケーションを深められたと同時に、筆者にとって、幼児の鑑賞体験に関する多くの気づきを得た経験となった。この3つのポイントについて来館当日に園児にたずねてみたところ、「これみっけ!」は多くの園児が覚えており、3つのポイントすべてを覚えていた園児もいた。また、後述する来館後の保護者アンケートより、この取り組みが来館時の親子での自由鑑賞に役立ててもらえたこともわかった。

(3) 鑑賞シート「しょうぞうかんでこれみっけ!」の制作

前述の活動と同時並行で、未就学児から小学校低学年を対象とした鑑賞補助ツールの制作に取り掛かった。本ツールは一般の来館者にも無料配布することを想定し、制作に必要な条件を以下のとおり整理した。

- ①展示替えにも対応できる汎用性の高い内容
- ②子どもが使いやすく親しみやすいデザイン
- ③子どもに主体的な作品鑑賞を促すような仕掛け

このような条件のもと、特定の形あるいはモチーフを展示室内で探すツールがよいのではないかと思案した。こういった行為を促すための取り組みは、単純でありながらも、対象をよく観察・鑑賞したうえで自分の知識や経験と結び付けて問題を解決するという博物館での学びを体現し得る重要な手法である (註10)。博物館・美術館に慣れていない子どもたちにとって、形状も大きさも多種多様な展示作品のなかから、まずは自分の知っている形やモチーフを探すことが博物館体験のはじめの一歩になり得ると考えた。

そして、今回対象とする比較的低年齢層の子どもたちにより有効であると感じたのが、該当箇所に穴を開けることのできるビンゴカードのような形式である。この形式は、東京国立近代美術館をはじめ、複数の博物館施設で用いられており、その使用状況等を見聞し、穴を開けるという行為自体に面白さがあること、一目で達成状況がわかり、自己肯定感ややる気の創出につながりやすいこと、身一つで手軽に挑戦できることなど多くのメリットを見いだすことができた。これらの先行事例を参考にしながら、当館オリジナルのツールを制作することに方針を決めた。

こうして完成した鑑賞シート「しょうぞうかんでこれみっけ!」は、縦11.2cm、横14.8cmの横長の判型で、手の小さな子どもでも扱いやすい大きさとした。探してもらう形やモチーフの数は8つとし、穴開きの部分にはそれぞれかたち探しの参考となるイラストを付した(図7)。また、裏面には鑑賞中の注意事項を「おやくそく」として示し、周りに当館収蔵作品の画像を配した。これは、展示室にどんなものがあるのか、またここがどのような場所で何に気を付ける必要があるのか、大人と子どもで確認してもらうことを目的としている (#11)。本シートの効果については後述する。



図7 しょうぞうかんでこれみっけ!(表面)

来館当日のプログラムと園児の様子

閉館日の12月11日(月)、園児・教員・保護者ほか合わせて55名が来館した。以下、当日のプログラム内容と園児の様子について流れに沿って報告する。当日のスケジュールは表1のとおりである。なお、皇居東御苑の散策については、紙幅の関係上、割愛する。

表1 井草幼稚園来館スケジュール

10:00頃	バス到着。バス内でご挨拶
10:15~10:25	館内へ移動
10:30~10:50	展示室1・2を解説付きで鑑賞 展示室1:特別展示「令和の御代を迎えて」の解説(展覧 会担当研究員) 展示室2:《動植綵絵》の解説(絵画担当研究員)、模写と の比較
10:50~11:05	自由鑑賞 (しょうぞうかんでこれみっけ!を配布)
11:10~11:30	皇居東御苑(二の丸庭園)の散策
11:30頃	バス出発、お見送り

(1) 解説付き鑑賞

来館人数が55名と大人数であったことから、2つの展示室を2グループ交替で鑑賞した。グループ分けは人数を均等にするため、Aグループ:年長組・年少組(「紅葉小禽図」「貝甲図」「梅花群鶴図」制作)、Bグループ:年中組・満3歳児クラス(「棕櫚雄鶏図」制作)とした。展示室ごとにその様子を説明する。

展示室1:特別展示「御即位5年・御成婚30年記念 令和の御代を迎えて―天皇皇后両陛下が歩まれた30年」 の解説・鑑賞

本展は、天皇陛下の御即位5年、天皇皇后両陛下の御成婚30年を記念し、宮内庁の特別協力のもと、 天皇皇后両陛下並びに愛子内親王殿下の歩みをゆかりの品々とともに紹介した展覧会である。ここでは まず、展覧会担当研究員が両陛下について説明をしたのち、展示室を回りながら作品数点を取り上げて 解説を行った(図8)。

解説中の園児たちは緊張もあったのか、全体を通じて非常に静かで、また反応も少ないように感じた。しかし、愛子内親王殿下が着袴の儀でご着用になったご装束の説明で、本儀礼が一般の七五三にあたるものであることを説明すると、自分たちの七五



図8 展示室1での鑑賞風景

三の経験を親子で話している姿が見受けられた。また、両陛下が即位の儀でご着用になったご装束に関しては「雛人形の衣装に似ている」といったような発言も聞かれた。

その後の自由時間では、即位の儀の記録映像を見たり、作品の前で親子や友達と話したり、それぞれが気になるものを見つけている様子がうかがえた。保護者アンケートには、本展展示作品への言及もみられ、子どもたちの興味関心の多様性に改めて気づくことができた。

展示室2:《動植綵絵》の解説・鑑賞、園児制作の模写との比較

本室では、開館記念展「皇室のみやび一受け継ぐ美一」の第1期として、当館収蔵の国宝8件(開催時)のうち4件を紹介した「三の丸尚蔵館の国宝」展を開催。《動植綵絵》の原本を前に絵画担当研究員が作品解説をして、原本を間近で鑑賞してもらい(図9)、その後園児制作の模写を対面に並べ、比較する時間とした。なお、「貝甲図」の立体制作は、運搬の都合上持ち込みができず、模写3幅のみの対面となった。

まず、《動植綵絵》の作品名の意味や、作者・制作年代について簡単に説明をし、古い作品であるがゆえにあらゆる方法で保護を図っていることなどを伝えた。別室と同様、緊張の面持ちで解説を聞いていたが、こちらからの問いかけに対しては反応があり、「どうしてガラスケースに入っていると思う?」という質問には「しわしわになっちゃうから」「破れないように」といった答えが返ってきた。

その後ケースに近づいて「なにか気づくことはある?」とたずねると、特に自分の模写した作品についてさまざまな発言が出た。筆者はBグループの担当であったため、「棕櫚雄鶏図」に対する発言に限



図9 《動植綵絵》を間近で鑑賞する様子

定されてしまうが、たとえば次のような発言である。「(筆者補足:棕櫚の葉が) ギザギザしている」「黒い鶏のしっぽが太い」「目の色が薄かった」「顔がちょっと違う」など。この時はまだ園児の模写の展示をしていなかったにもかかわらず、自分たちの記憶のなかの模写と目の前の原本を比較し、その違いに注目して発言していたのである。そして、普段から美術館に慣れ親しんでいるような大人の鑑賞者と同等かそれ以上に、非常に細部にわたって鑑賞していることも明らかである。筆者の私見は後述するが、この《動植綵絵》の鑑賞は、模写・立体制作と博物館・美術館における鑑賞体験がもたらす教育的効果についてさまざまな可能性を感じた時間であった。

原本の鑑賞後、園児の模写を原本と対面に配置した(図10)。保護者にとっては、初めて園児の制作した

模写を目にする機会となり、驚きの声が上がった。 その後、原本と模写を比較して感想を聞く時間としたが、原本の鑑賞ですでに発言があったことや、事前の計画不足によりうまく子どもたちの発言を引き出すことができなかった。この点は反省点であり、 今後の事業計画に生かしていきたい。

(2) 自由鑑賞

冒頭に鑑賞シート「しょうぞうかんでこれみっけ!」(以下「シート」)を配布し、使用方法を説明したのち、自由鑑賞とした(図11)。シートの利用は任意としたが、管見の限り全員が挑戦していたと思われる。シートを手にした園児たちは、それまでの大人しかった様子から一転、2つの展示室や廊下を自由に行き来し、友達や保護者と楽しそうに過ごしていた。8つ全ての穴が開いたシートを誇らしげに職員に見せてくれる子、ヒントを求めにくる子、穴の開いた部分に目を当てて遊ぶ子など、さまざまな様子がみられた。

このシートに対しては、アンケートでも多く意見 をいただき、年齢問わずおおむね高評価であった。 詳細は後述するが、来館時のプログラム全体のなか



図10 原本と模写の対面



図11 鑑賞シートを使っている様子

で大きな役割を果たしていたと看取される。

プログラム全体を振り返ると、運営面に関して、場の雰囲気づくりや《動植綵絵》の鑑賞におけるハンドリングなどで反省点や改善点は見受けられた。しかし、おおむね充実した内容になったのではないかと評価している。

アンケートの分析と事業の総括

ここからは、来館後に実施した教員・保護者アンケート結果の概要を示し、これまで述べてきた内容もふまえながら、本事業の総括をする。

(1) 教員アンケート 回答者5名

来館時の満足度については、5名中4名(80%)がとてもよかった、1名(20%)がよかったと回答している。子どもたちの様子について問うと、「美術館という特別な場所で、園児たちは予想以上に萎縮したのか静かだったと思います」「初めての場所で少し緊張していたのか、こちらの思っていた反応はあまりなかった」というコメントが寄せられた。最初に園児たちの緊張を解くためのアイスブレイクなどの必要性を痛感した。また、模写・立体制作と原本鑑賞を組み合わせた事業の効果については、5名全員が「効果があった」と回答している。「実物を見た際、全員が「すごい!」と言って、自分たちが制作したことをよく覚えており、しばらく静かに見ていたことが印象的でした」「子ども達の中に新たな感覚が備わったのではないかと思います」というコメントからは、原本に対する思い入れと鑑賞態度の深さや、模写・立体制作と鑑賞を通じた感覚の変化などが示唆される。また、「即時的な教育的効果は個人差がありますが、(中略)美術館にじぶんたちの絵が持ち込まれること、国宝の原画と対面できたことは、いま園児たちには分からないかも知れないが将来、これがどれだけすごいことだったか分かるだろう(後略)」とコメントがあり、長期的な視点で見た教育的効果についても言及があった。

ここからは筆者の私見であるが、3ヵ月という制作期間を経て、園児のなかには《動植綵絵》=自分たちが制作した作品であるという意識が強く芽生えていたと考える。目の前の原本はお手本であったと同時に、自分たちの制作品を基点に、それと酷似する作品という感覚でも捉えており、同じ「動植綵絵」の「制作者」としてその違いに細かく気づき、言及をしていたのではないかと想像されるのである。以上、短絡的ではあるが、長期間の模写・立体制作が対象作品に対してより細かな鑑賞を可能とすること、そこには「制作者」としての意識が生まれているのではないかと仮説立てる。今後同様の機会があれば、この仮説をもとにより理論的かつ実証的に事業計画を行いたい。

(2) 保護者アンケート(資料) 回答者:23名、うち5名は来館当日欠席

まず、当館の認知度と博物館来館経験についてたずねる質問をした。来館前から当館を知っていたかどうかについては、知っていた人は5名(21.7%)に留まった。また、園児らの博物館来館経験については、16名(69.6%)がありと回答しており、来館先はさまざまであった(註12)。

次に、来館時の満足度については、当日参加の18名のうち11名(61.1%)がとてもよかった、6名(33.3%)がよかったと回答している。来館時、子どもの様子や会話で印象に残ったことを問う自由回答欄には、《動植綵絵》の原本を鑑賞した感想や、展示室内で印象に残った作品に関する言及などがみられたほか、前章でも触れたとおり、17回答中9回答に「しょうぞうかんでこれみっけ!」が楽しかったようだ、という趣旨の記述があった。その他の自由記述欄にもコメントがあり、「帰ってからもずっと眺めていました」という声からは、来館後も当館での経験を振り返り、それをポジティブに捉えていたと想像できる。さらに、「細かいところまでしっかり見るきっかけにもなり、子どもも楽しそうでした」という声からは鑑賞態

度の変化をもたらしたことがうかがえる。以上から、シートが博物館という場所を楽しむはじめの一歩として機能し、さらには博物館体験のふりかえり、鑑賞の一助にも寄与したといえる。

また、「また三の丸尚蔵館に子どもと一緒に来館したいか」という問いに対しては、欠席者を含む23名のうち17名(73.9%)が「はい」と回答している。今後当館に期待する展示やイベント等については、「子ども大歓迎の日」の設定や「子どもと一緒に参加して体験できるイベント」「参加型のイベント」という意見が寄せられた。これらの意見は、令和8年度のグランドオープン以降の教育普及事業の計画立案に生かしたい。

資料 保護者アンケート

2023年12月実施 回収:23枚(有効:23枚)

○所属組

月組(年長組)	7	30.4%
山組(年中組)	8	34.8%
つぼみ組 (年少組)	7	30.4%
かりん組(満3歳児クラス)	1	4.3%
合 計	23	100.0%

○皇居三の丸尚蔵館(旧:宮内庁三の丸尚蔵館) について、以前からご存じでしたか

はい	5	21.7%
いいえ	18	78.3%
合 計	23	100.0%

○これまでお子様と一緒に美術館や博物館等の施 設に行ったことはありましたか

はい	16	69.6%
いいえ	7	30.4%
合 計	23	100.0%

○これまで行った場所

ちひろ美術館、国立科学博物館、国立新美術館、国立西洋 美術館、東京国立博物館、原美術館ARC、吉祥寺美術館、 世田谷美術館、横須賀美術館、東京都庭園美術館、太田記 念美術館、佐野美術館、富岡製糸場、東京農大「食と農」の 博物館、多摩六都科学館、いのちのたび博物館、東京都美術館、東京都写真美術館、消防博物館、渋谷区立松濤美術館

○皇居三の丸尚蔵館での展示鑑賞、皇居東御苑庭 園の散策について

とてもよかった	11	61.1%
よかった	6	33.3%
普通	1	5.6%
あまりよくなかった	0	0.0%
よくなかった	0	0.0%
合 計	18	100.0%

○またお子様と一緒に、皇居三の丸尚蔵館に行き たいと思いますか

はい	17	73.9%
いいえ	1	4.3%
どちらともいえない	3	13.0%
未回答	2	8.7%
合 計	23	100.0%

○展示鑑賞中、お子様の様子や会話の中で印象に残ったことがあれば教えてください

- ・みっけは子供達がとても楽しそうにさがしていました。
- ・両陛下のお着物を見て、「生地が輝いている!」と驚いていました。鑑賞シートに夢中でした。絵の中に入ろう、これみっけ、まねっこというキーワードを事前に教えていただけたので、「鑑賞するのが楽しい」と言っていました。
- ・ゲーム (筆者補足:鑑賞シートのことか)を一生懸命やっていた
- ・実物すごい!! と見上げていました。
- ・雅子さまのドレスをとても気に入っていました。
- ・スタンプラリー?の用紙で館内のデザインを探すゲームが参加型でとても楽しそうでした。
- ・作品や紹介映像をずーっとながめて見入っていました。年中の娘が一番気に入って見ていたのがモンゴル兵が攻めてきて船で 戦っている絵でした。子供の意外な興味が知れて良かったです。
- ・模写で自分が担当した所(色ぬり)について、話してくれた。子ども向け鑑賞シートを活用しながら、本当に楽しそうに鑑賞していた。
- ・展示には風邪で欠席した為参加できませんでしたが、事前に受けたエクササイズの後「絵の世界の中に入るんだよ。」といきいき と語っていたのが印象的でした。
- ・見つけ遊びが楽しそうでした。

^{*}当日欠席の5名は除く

- 「あれ、ほんもの?」と展示品を見つけている様子が印象的でした。
- ・子供は、はじめての体験だったので、いつも走り回る子がとてもおとなしかったです。もらったクイズは楽しかったようです。
- ・1つ1つの展示品がなになのかを聞いて、分かろうとしている所がうれしかったです。
- ・ご養蚕の繭や生糸に興味を持ったようでした。いろんな色があるんだねと、蚕のまゆの色のちがいに気付いていました。
- ・とりさんたくさんいる (いろいろな種類のとりをさして)
- ・初めての場所で色々な物に興味を示し、触ってしまわないか不安になりましたがよく観察していてこれみっけ!のシートを楽しんで取り組んでいたことです。
- ・以前行った美術館では、入館前に係の方から、子どもに直接「静かにしてね!」と説明があり、緊張から、すぐに帰りたがりました。今回は「みっけ」を通して遊び感覚で作品に触れることができたので、「まだまだここにいたい!」と言っていました。子ども心をくすぐるアイデアが素晴らしかったです。

○今後、当館に期待する展示やイベントがあれば教えてください(一部抜粋)

- ・幼児を連れて行ける機会は中々ないので、子ども向けのイベントなどで「子どもがいても大丈夫」という日があると有難いです。
- ・4のような参加型ゲーム(筆者補足:鑑賞シート)で館内をまわれると、親子で楽しめる身近な場所になると思います。
- ・幼児向けのイベントや参加型のイベントがあれば嬉しいです。
- ・年に1度でいいので子ども大歓迎の日があればうれしいです。
- ・子供と一緒に参加して体験できるイベント。実際に絵を書いたり、作ったりする。

○その他ご感想やご意見があればご記入ください (一部抜粋)

- ・普段から公園や動物園などで元気よく走り回ることが多く、なかなか芸術にふれることがなかったので今回参加できて本当に良かったです。感謝です。園児貸切はありがたかったです。
- ・「これみっけ!」のワークシートがお気に入りで、帰ってからもずっとながめていました。鑑賞のきっかけになる素晴らしいシートをありがとうございました!
- ・貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。子供と一緒に文化や芸術に親しむことができ、幸せな時間を過ごすことができました。
- ・家で5才の娘が伊藤若冲の絵について細かく説明してくれました。5才だからわからないと決めつけてはいけないなと感じました。本物に触れさせてあげることは大切だと思います。
- ・歩くことが苦手な子でしたが、三の丸尚蔵館の皆さんのお陰で素敵な思い出が作れました。ありがとうございました。
- ・事前の美術館の楽しみ方とあわせて、展示品の中から形を探すのが楽しかったようです。見るだけではなく体験を組み合わせた 幼児にも楽しめる美術鑑賞にしていただき、ありがとうございました。その後の庭園散策は年長さん向けだったと感じました。
- ・事前に"これみっけ"や"絵の中に入ってみよう"など、鑑賞の仕方をレクチャーしていただいていたので、親も子どもと何を見ながら会話すれば良いのかがわかって、とても楽しく落ち着いて見ることができました。
- ・貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。しょうぞうかんでこれみっけ!が子どもと一緒に楽しめてとてもよかったです。細かいところまでしっかり見るきっかけにもなり、子どもも楽しそうでした。
- ・休館日にも拘わらず、温かい皆さまのお出迎えが感動しました。説明してくれる方、案内の方、誰もが穏やかな言葉遣いで、子ども達も、心から楽しんでいる様子が伝わってきました。正直「まだ美術館は早いかな?」と行く前は思うこともありましたが、子どもの表情や言葉から、行くことができて良かったと思えました。レアなおみやげまで、本当にありがとうございました!

その他の自由記述欄には、子どもと一緒に美術や芸術を楽しむ機会となったとするコメントがあり、親子間のコミュニケーションの醸成の場となったこともうかがえる。これには、シートや出前授業が一役買ったといえ、本事業全体を通じて、親子の博物館体験の充実に一定の成果を出すことができたと判断する。今後、子ども向けのプログラムを企画実施していく際の指標のひとつとしたい。

本事業は、展示鑑賞の受入・解説にとどまらず、模写・立体制作という園独自の教育活動との連携、そして事前の出前授業や鑑賞シート制作と、当館にとって初の試みばかりであったが、園児たちの反応などから、それぞれのプログラムで一定の効果があったと評価している。一方で、記念事業としての実施という面で、目的の明確化と共有に課題が残ったことも事実である。また、運営面でも細かい点で改善点は見受けられ、今後の企画運営に生かしていく所存である。

おわりにかえて一今後の展望

ここまで、井草幼稚園との連携事業の内容について報告をした。最後に本事業を終えて、筆者が感じた今後の展望について2点ほど記しておきたい。まず、今回結論づけまで叶わなかった模写・立体制作と鑑賞を組み合わせた教育的効果の可能性である。たとえば、学校教育の現場では、さまざまな研究視点から模写と鑑賞を組み合わせた授業が行われている (註13)。また、美術館における事例としては、同じ未就学児を対象としたプログラムで、美術館で作品を鑑賞したのち、その場で該当作品を模写するという大原美術館 (註14)、宇都宮美術館 (註15) での取り組みや、中学生対象であるが、学校であらかじめ絵画作品の模写とディスカッションをしたのち、美術館でその原本を鑑賞するという福岡市美術館での取り組み (註16) があり、いずれの考察でも模写と鑑賞の相互作用に前向きな結果が示されている。しかし、本事業のように、数ヵ月かけてひとつの作品を模写したのち、その対象を鑑賞するという取り組みは例がなく、未就学児による本格的な描写の再現という特殊性も考慮する必要がある。たとえば、模写期間や手法の違いによる鑑賞態度の変化や、模写前後の作品に対する心理的変化など、さまざまなデータ収集と分析により新たな研究ができるのではないかと考える。そして筆者が仮説づけた「制作者」の意識とはなにか、明確化する必要があることは言うまでもない。

そしてもう1点は、「ふれる動植綵絵」制作案についてである。これは、和紙やボンドによる立体的表現や、粘土によるモチーフの立体化などのアイディアから着想を得たことであるが、制作そのものを参加型のプログラムとして実施することで、参加者に対して活動そのものに対する楽しみの醸成、また絵画を立体化することによる新たな見方の創出が期待できる。

また、社会的包括の観点などから、触図や立体コピー、異素材を使った立体制作などさまざま方法を用いて、絵画作品やその一部を立体的に再現して鑑賞に用いる取り組みが博物館・美術館施設で広がっている。「ふれる動植綵絵」は、こういった先例 (註17) に続き、当館収蔵品の代表的作品である《動植綵絵》を年齢や国籍、障害の有無などに関係なく、より多くの方に知ってもらう方法のひとつになり得ると考えた。さまざまな背景を持つ鑑賞者同士がそれぞれの解釈を共有しあえるようなプログラムへの展開も可能である。

このように、当館初の教育機関受入、そして初の未就学児向け事業実施という範囲を超えて、筆者にとって非常に多くの示唆を与えてくれた経験となった。これを今後の当館の研究や事業に昇華できるよう、引き続き精進していきたい。

(いのうえ まりな 当館学芸部展示・普及課研究員)

註

- (1) 絵画作品の模写は、一般的には原本を忠実に写し描くことを指すが、井草幼稚園で制作される模写は、原本の描写を 真似て写しながらも、その形式や表現方法は必ずしも原本作品同様ではなく、独自性もある(具体例は後述ほか口絵 カラー図版を参照のこと)。本稿で模写と指す場合、このような形式の作品も含むこととする。
- (2) 当館が館内で行った初の教育普及事業は、「いとをかし―和みのけしき」展(2021年11月、宮内庁三の丸尚蔵館)における鑑賞ガイド「みるみるガイド」の配布および人気作品投票である。また、当館主催で企画実施した初の子ども向け事業は、地方展開事業の一環として開催した「日本美術をひも解く―皇室、美の玉手箱」展(2022年8月、東京藝術大学大学美術館)における「ほっぷ!すてっぷ!! じゃんぷ!! ! プログラム」(書の臨書コーナー設置とワークシート配布)である。
- (3) 鈴木積善については、矢治夕起「昭和戦中期の戦時託児所について―幼稚園から戦時託児所への転換事例―②」『淑徳大学短期大学部研究紀要』第54号、淑徳大学短期大学部紀要委員会、2015年2月、p.95-103を参照した。
- (4) 平成29年文部科学省告示第170号 (2017年10月27日付) による。
- (5) 井草幼稚園の模写制作の経緯等については、当園副園長・鈴木啓順氏ほか、教員方からのご教示による。
- (6) 当園副園長・鈴木啓順氏は「模写をしている時点で、その対象作品の素晴らしさに気づくことは難しいかもしれないが、自分が模写した作品のことは成長した時にも必ず覚えている。その時に改めて作品の良さに気づいてもらえればよい」と考えているという。このような視点は博物館体験の影響を長期的に捉えるうえでも大変参考になる。
- (7) 井草幼稚園では、本年度に「池辺群虫図」の模写を行っており、2025年2月現在《動植綵絵》の模写は合計8幅となっている。

- (8) 詳細は次章に後述するが、園児による《動植綵絵》制作は模写3幅と、粘土を用いた模造と模写を組み合わせた立体制作1幅で構成される。以降、本事業での取り組みを指し示す際は「模写・立体制作」とする。
- (9) 各幅の制作を計画・指導した教員は以下のとおりである。「梅花群鶴図」: 夏井彩教諭、「棕櫚雄鶏図」: 浅野歩教諭・ 徳田真由子教諭、「紅葉小禽図」「貝甲図」: 関野結衣教諭
- (10) アメリカの博物館教育学者ジョージ・E・ハインは「知識は学習者自らによって構成されていく」とする構成主義の立場から博物館での学びを考察しており、「来館者にとって博物館体験を前向きな経験とするためには、博物館の中身と接する際に、彼らが見る物、やること、感じることが、来館者がすでに知っていること、理解していること、認識していることと結びつくようになっている必要がある」として、このつながりこそが新しい意味(学び)を作り出すと述べている(ジョージ・E・ハイン著 鷹野光行監訳『博物館で学ぶ』同成社、2010年、pp.229-230)。
- (11) 裏面の収蔵作品画像の配置については特に思慮していなかったのであるが、後日外部の博物館関係者より「表面のモチーフとリンクする配置(たとえば表面が花になっているなら、花に関連する作品画像を配置)でないと、子どもたちが混乱するのではないか」という指摘をいただいた。この内容は今後の制作に生かしたい。
- (12) 当館と近い館種の来館経験をたずねるため、質問は「これまで美術館や博物館等の施設に行ったことはありましたか」としており、回答には動物園・水族館・植物園などの館種は含まれていないことを補足しておきたい。
- (13) たとえば、中学校2年生対象に、日本美術の特質の理解を目的として西洋の水彩画と《鳥獣戯画》の比較鑑賞および《鳥獣戯画》の模写を試みた授業や、小学校低・中・高学年を対象に、作家の精神世界や作品の主題への想像を通じて、自己の生きる意味を創造できる「想像力」の育成を目的として、絵画作品の模写とその前後での対話型鑑賞を試みた授業などがある(蝦名敦子「鑑賞教育における複製や模写の問題―日本画の授業実践をケース・スタディとして―」『美術教育学』第25号、美術科教育学会、2004年3月、pp.113-125、國清あやか『図画工作科の鑑賞教育における想像力を育む学習指導の開発―探究的な対話と模写を取り入れた絵画鑑賞を通して―』広島大学、2017年、学位論文甲第7322号)。
- (14) 岡山万里・高橋敏之「大原美術館における模写による幼児のための絵画鑑賞プログラム」『美術教育』2010巻第293 号、日本美術教育学会、2010年3月、pp.18-26
- (15) 有馬知江美「哲学教育に関する考察(X)—美術館における幼児を対象とした美術鑑賞プログラム実践(前篇)—」 『作新学院大学女子短期大学部紀要』第29号、作新学院大学女子短期大学部、2006年3月、pp.15-34、同「哲学教育に関する考察(XI)—美術館における幼児を対象とした美術鑑賞プログラム実践(後篇)—」『作新学院大学女子短期大学部紀要』第30号、作新学院大学女子短期大学部、2007年3月、pp.25-47
- (16) 鬼本佳代子「美術館における鑑賞とその事前授業の実践」『大学美術教育学会誌』第40号、大学美術教育学会、2007年 3月、pp.89-94
- (17) 事例を挙げると枚挙に暇がないが、この「ふれる動植綵絵」構想の参考として、「ユニバーサル・ミュージアム―さわる! "触"の大博覧会」展(2021年9月、国立民族学博物館)に出品された京都市立芸術大学の学生らによる名画の二次創作「さわる絵画」が挙げられる。この制作については以下に詳しい。国立民族学博物館編『特別展 ユニバーサル・ミュージアム―さわる! "触"の大博覧会』図録、小さ子社、2021年、辰巳明久、楠田雅史、広瀬浩二郎「特別展『ユニバーサル・ミュージアム―さわる! "触"の大博覧会』関連『さわる絵画』ができるまで―その多様性と可能性|『季刊民族学』第179号、2022年1月、pp.90-103

謝辞

学校法人松峯学園井草幼稚園 鈴木澄子園長、鈴木啓順副園長はじめ、教員のみなさま方には、本事業の実施および本稿の執筆に多大なるご協力並びにご教示、また記録写真の掲載のご許可を賜りました。また、「しょうぞうかんでこれみっけ!」の制作にあたっては、独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館 教育普及室、石川県立美術館の実施例を参考にさせていただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。





17 「梅花群鶴図」の模写 2023年度 井草幼稚園制作









20 「貝甲図」の立体制作 2023年度 井草幼稚園制作

考古学、 科学等) に関わる事業・ を題材とし、 た審査をし、 このうち、 掲載内容は、 本紀要の投稿原稿は、 における研究、 博物館学、 関連諸学 採用決定したものを掲載しています。 事業・事例等報告や調査概報について 事例等報告とします。 収蔵品および館の業務に関わるもの 博物館教育、 (美学・美術史学、 および上記以外の館の活動 編集委員において査読を経 博物館情報、 歴史学、 保存

査読はないものとします。

- 当時のものです。 名や作者、制作年などの表記は、 『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』 紀要発行 中、作品
- 丸尚蔵館に属し、本ファイルを改変、再配権は独立行政法人国立文化財機構皇居三の『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』の著作 きません。 布するなどの行為は 有償・無償を問わずで

編 集 委

委員長 員

建 石

徹

五 戸

田 浩

真 行

瀬 髙

梨 味 谷 聖 之 愛

蔵 -皇居三の丸尚蔵館紀要 1〇二四(令和六)年度 創刊号(通号三〇号)

尚

発編 行集 0 丸

東京 皇 千代田区千代田 尚 蔵 館

北海道札幌市中央区北三条東五-五-株 式 会 社 ア イ ワ 1 九 ۴

制 作

一〇二五年三月三一日発行

翻訳

Щ

 \Box

I敏之

(株式会社イー・

シー)

©2025, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan